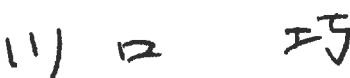


## 審査結果の要旨

報告番号	乙 第 3026号	氏名	最所 公平
		主査	 (印)
審査担当者		副主査	 (印)
		副主査	 (印)
主論文題目 : Effectiveness of the GerdQ Questionnaire for Diagnosing Gastroesophageal Reflux Disease after Esophagectomy for Esophageal Cancer (食道癌に対する食道切除後における GerdQ 問診票の有用性についての検討)			

### 審査結果の要旨（意見）

本論文は、食道癌術後患者 124 名を対象に、術後の主な合併症の一つである胃食道逆流症（GERD）の診断における GerdQ 問診票の有用性を検討した臨床疫学研究である。プライマリケアなど一般診療の場で GERD 診断のための補完的ツールとして使用されている 6 項目からなる GerdQ 問診票と客観的検査（上部消化管内視鏡検査と 24 時間 pH モニタリング検査）結果で判定した GERD との関連性を、術後 1 ヶ月目、術後 1 年目、術後 2 年目において検討した。GERD の発症率は術後経過とともに増大（31.6-49.2%）しており、術後 1 年目以外の時点では GERD の有無別 GerdQ スコアは、GERD 有りで有意に高かった。GERD 有無の判別に対する最適な GerdQ スコアのカットオフ値は、術後経過時間により異なっており、感度、特異度のバランスの点からも有用なツールとはなりにくいことを明らかにした。一方、GERD 有無に対して GerdQ の項目別の関連では、呑酸の症状のみが有意であったことを示した。GERD 発症に対する感度、特異度は、術後 2 年目ではカットオフ値 7 点で感度 77%、特異度 56% とプライマリケアでの成績と比較的近似したが、その他の時点では、感度と特異度のバランスが悪かった。本論文は、食道癌術後の合併症である GERD の診断補完ツールとして GerdQ 問診票の有用性が不十分であることを明らかにし、新たな問診票作成の必要性を示した点で、貴重な臨床疫学研究であり、学位論文として十分に価値があると考えます。

### 論文要旨

胃食道逆流症（GERD : gastroesophageal reflux disease）は食道癌術後の主な合併症の一つである。GerdQ 質問表はプライマリケアでの GERD 診断のために開発された質問表であるが、食道癌術後の GERD 診断における有用性は定かではない。今回、我々は食道癌術後の GERD 診断における GerdQ 問診票の有用性を検討した。2010 年 1 月から 2016 年 12 月に当院で食道癌に対し右開胸開腹食道亜全摘、胃管再建術を施行した患者を対象に、術後 1 ヶ月目、術後 1 年目、術後 2 年目に上部消化管内視鏡検査、24 時間 pH モニタリング検査による GERD 診断、GerdQ 問診票による症状評価を行った。GerdQ 問診票のスコアと客観的検査の関連性を評価した。GERD の発症率は 31.6-49.2% だった。GerdQ に対する感度、特異度は、術後 2 年目ではカットオフ値 7 点で感度 77%、特異度 56% とプライマリケアでの成績と比較的近似したが、その他の時点では、感度と特異度のバランスが悪かった。また、最適なカットオフ値も各時点で異なっていた。GerdQ 問診票は食道癌術後患者における GERD 診断には有用ではない。